



今、中国は もう一つの革命

東京外国語大学教授

中嶋 嶺雄

関西大学教授

谷沢 永一

なかじま・みねお 1936年松本市生まれ。1960年東京外国語大学中国科卒業、1965年東京大学大学院国際関係論課程卒業。現在、東京外国語大学教授、社会学博士。この間、外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大学客員教授、パリ政治学院客員教授などを歴任。専攻、国際関係論、現代中国学、アジア地域研究。

著書に「中国に呪縛される日本」（文藝春秋）「現代中国の政治と戦略」（PHP）「ゴルバチョフソ連の読み方」（第一企画出版）など多数。

ソ連外交の

二極思考から多極思考への転換

谷沢 ゴルバチョフがやっとチャイナに乗り込みましたね。皮肉なことに、民主化を要求するという北京の学生デモの渦中でしたが、ソ連指導者としては、実に三十年ぶりというゴルバチョフの今回の訪問には、どういう読みとプロセスがあったわけでしょうか。

中嶋 私は、ゴルバチョフの訪中自体は、予測されていたことだと思えます。ソ連も、いわゆる平和外交で積極的にあちこちとの関係を改善してきて、中国との関係改善は、日ソ関係を除くと最大の課題だったと思うんです。そして、今回の中ソ首脳会談は、結果的には大変なお土産を中国に残したことになると思います。しかも彼が帰国したその日から始まったでしょう。

谷沢 ゴルバチョフはなぜもっと早くチャイナに来なかったんでしょう。

中嶋 というより、ほぼスケジュール通りだったんじゃないでしょうか。ゴルバチョフが出てきたのは一九八五年春、まず足場を固めてグロムイコなど保守派を打倒し、外交関係を一新しましたね。科学アカデミーの世界経済、国際関係研究所長ら学者を登壇させて、ソ連史上初のブレイン政治をやりました。

ブレイン政治で、まず外交関係をゴルバチョフ色で固めたんですが、同時に保守派の一角をほぼ完了しまして、それに時間がかかった

本音を語る

んですね。そして、翌八六年七月のウラジオストック宣言です。日本の新聞ではもっぱらソ連のアジア太平洋への関心、日本に手をさしのべているのだと報じられましたが、テキストの大部分はソ連国家がいかに病んでいるかということと、そして、広大な中国への尊敬の念でした。

八二年にブレジネフがタシケントで中ソ和解を呼びかけたのは、「もう一度ソ連に帰ってこい」という、世界は米ソ二大国に分かれており、中国はソ連側に帰るべきだとするいわば二極思考だったんですね。

これに対してゴルバチョフは、ヨーロッパを非常に重視すると共に、中国など東アジアを重視し、更にアメリカやカナダもと、いわば多極思考。中国にとっては非常に心地よく響くわけです。しかも偉大な社会主義の大国という新しい思考で呼びかけました。今回の中ソ首脳会談で鄧小平もゴルバチョフのウラジオストック宣言に言及しましたね。それに対してゴルバチョフも「毎年一つずつ障害を取り除きましょう」と発言しました。確かに、アフガニスタンからの撤退、そしてアフガニスタン同様、中ソ国境であるモンゴルからの撤兵は、ゴルバチョフ・鄧小平会談が行われたその日、五月十五日に開始されました。

谷沢 それには、彼らの政治体制に独得の

入念な下地工作が必要だったんでしょね。
中嶋 昨年暮れから今年一月にかけて、双方で二回外相会議をしています。ゴルバチョフ

フは訪中でイルクーツクに一晚泊まったんですが緊張で眠れなかったそうです。しかし鄧小平との会談に臨み、中国の文化や文明に接してみたいと楽しみにしていたのですが、学生たちの民主化要求デモでかつての紫禁城（故宮博物院）を見ることさえできないで帰国しました。

谷沢 紫禁城へ案内することさえ危なかったんですか。昔の栄光を見せつきたい虚勢は満々だったでしょうにね。万里の長城へは行きましたね。

中嶋 私は、紫禁城はぜひ見てほしいなあとヤキモキしていたんですが、ゴルバチョフも残念だったでしょうね。非常に痛烈な歴史の皮肉というか、行き違いの中で中ソ首脳会談は終わったのですが、そこまでのプロセスで考えなくてはならないことは、鄧小平はなかなかしたたかだということです。

鄧小平は、日本に対しては絶対に中ソの和解はないと言明しながら、その裏でソ連と齟齬をしていたんです。私はその齟齬を見えていましたが、日本の政府はこれを否定し、中曽根さんも「まだ無理だ」と言われるとハイハイと帰っちゃった。

民主化運動の本質

中嶋 衛星テレビで見えていても、世界のスター、ゴルバチョフさえも鄧小平と並ぶと親子ではなく、老師と学生に映るんです。ゴル

バチョフはよく聞いていましたね。やはり、中ソ和解をここまで持っていくには中国には、鄧小平しかいなかったんですね。彼は、中ソ両国の対立抗争の三十年間の生き証人でもあるわけです。中ソ論争のきっかけになったスターリン批判が行われた五六年の二十回大会にも、鄧小平は出ているのです。そして、スターリン批判を目撃して、「中国でこんな事になったら困る」という考えを密かに持ち、毛沢東の個人崇拜に抵抗する方向を見せたわけです。ところが毛沢東は、「これから毛沢東思想を奨揚しなきゃいけない」とし、絶対スターリン批判は受け入れられないという姿勢を貫きました。やがて、人民公社や台湾海峡をめぐる問題などで中ソは決定的に対立し、ソ連が中国に原爆なんかを提供することになっていった中ソ新軍事協定をわずか三年で、五九年に破棄し、そのことが両国の決裂を決定的にした。

五八年にフルシチョフが訪中しました。日本では中ソ両国の親密ぶりが報じられましたが、裏ではフルシチョフが連合艦隊への参加を要求したりし、これに抵抗して毛沢東は「そんなことなら、もう一度ゲリラ戦争でお前たちをやっつける」なんて言っていたわけです。翌五九年、フルシチョフはキャンプデービットでアイゼンハワーと会った帰りに中国へ寄りましたが、この時は共同声明までは出た。それから三十年です。

鄧小平は、イデオロギー論争ではソ連と渡



中嶋 稯雄氏

り合ってきたのです。六三年夏、中国共産党代表団長としてスースロフ・ソ連政治局員とやり合って、席を蹴って帰ったわけでしょう。それを迎えた時の中国はすごかったんですね、北京空港には毛沢東や周恩来、劉少奇らが出迎え、まるで凱旋將軍でした。

ところがそのうちに段々と雲行きがおかしくなり、劉少奇や鄧小平の時代に移っていったことに毛沢東が不満で、文化大革命を發動する。鄧小平は、ソ連は修正主義だとは言ったのですが、毛沢東のようにソ連を敵として全面対決するところまではいかなかった。鄧小平のそこが生ぬるい、生ぬるいのは修正主義だとされ、フルシチョフは現代修正主義者であり、内なる敵は劉少奇であり鄧小平だという形で文化大革命は、展開されました。そして鄧小平は、文化大革命中に二度も失脚して復活しています。そのプロセスは大変なことです。

四人組を打倒したあと、華国鋒を追い落とす形で十年ほど前から中国共産党内で再び彼が指導権を握って非毛沢東化を行い、改革と開放の路線を進めて、中ソ間の詰めを行って、今回の三十年ぶりの中ソ首脳会談にこぎつけたわけですね。

谷沢 三十年ぶりになるチャイナとソ連との和解は、文字通り仕上げなんですね。

中嶋 鄧小平にとっても感慨深く、胸に迫るものがあつたと思うのです。ところが、それだけの大きな仕事をして、中ソ首脳会談が終わったその瞬間に、中国の学生や大衆は「お前はもう辞めろ」と言いだしたでしょう。今の中国の深刻なところがここにあるんです。

考えてみると、鄧小平は首相でもなければ党の書記長でもない。肩書きは中央軍事委員会主席。この組織は中央委員会に直属する第二線の組織です。一応、軍の統帥権は持つのですが、形式的には軍の統帥権はさらに国家軍事委員会にあって、それも兼ねており、実際は、軍の最高権力だけは握っているという形です。

中ソの首脳会談は軍人同士の会議じゃないわけですから、学生にしてみればゴルバチョフは民主化の旗手だと映つたのに対し、「鄧小平、お前はなんだ」という気持ちだったんでしょう。もう溜まりに溜まったものが出てきたという感じですね。

十六日の中ソ首脳会談は、まず午前中からお昼過ぎまで鄧小平・ゴルバチョフ、それか

ら政府レベルで李鵬・ゴルバチョフ、最後が党レベルで趙紫陽・ゴルバチョフでした。北京の大衆が鄧小平批判を始めたのは、この夕方からなわけですね。

谷沢 政府間、および党と党との間と、それぞれで会談はつきり位置付けられるとして、鄧小平・ゴルバチョフ会談というのは一体、何なのかということになるわけですね。しかし政治の駆け引きは、古今東西、肩書きと勲章を較べる園遊会ではない。隠然たる実力者の秘密交渉だつて当り前。しかし今度は学生連中がタテマエ論を持ち出して制度をうんぬんしたのが印象的ですね。

中嶋 制度的に何なのかという疑問は出てきます。しかも実際は、その場で中ソの正常化宣言をしましょうと言つて国家間の正常化が行われ、鄧小平が「この正常化には党と党との関係も含まれます」と語り、みんなが拍手しているわけです。そういうところは非常に問題がある。つまり、実質と形式が中国の政治ではいかに分離しているかというところを、学生たちが突き上げたわけです。鄧小平には法的根拠がないのですから。

谷沢 オモテから論じるところですよ。

中嶋 これを学生が突いたというところに、今度の問題がありますね。もちろん、ゴルバチョフが来たことで、学生たちはある意味ではそれを巧みに利用し、世界のジャーナリストもたくさんいるので盛りあがった。

また、胡耀邦の死に端を発する民主化の動



谷沢永一氏

きが出ていて、そのなかでも鄧小平が指揮されつつあったのです。学生たちは中ソ首脳会談が終わったその日に鄧小平に拒否権を発動したわけで、鄧小平自身にとっては意外だったでしょう。

出所進退を誤った鄧小平

谷沢 特にチャイナの歴史では、オモテのお札にオモテとウラ、ウラでしか通らない証文にまたオモテとウラ。その組み合わせが機能した呼吸を知らないのか、無視したのか。学生たちの攻め方は本当の資格を持たない人が隠然たる実権を持っていることに不満を表明する戦術ですね。

中嶋 今度の民主化運動の中でそういう意識が出てきた。これは中国では初めてじゃないでしょうか。今までの民主化闘争は、政治に利用されたり、結果的にそうなったりしているのですが、今度は、初めて学生たちが

「憲法」というようなことを言い出しているわけです。つまり、人治じゃなく、法治をやれ、ソ連でさえそれをやり始めた、東欧でさえやり始めている。「中国は何だ」ということなんでしょね。

鄧小平は、中ソ首脳会談が終わったら、そろそろ退こうと考えていたでしょう。そこに、学生たちが「お前は何だ」と突きつけたわけでしょう。これは彼にとって、痛いと思っていますよ。

谷沢 老化して理解力も衰えていますね。

中嶋 しかし今となつては、その引退の花道も自ら墓穴を掘るような形になりましたね。毛沢東は、時間というものは永遠であると考え、老齢化した時に自分自身が神様みたいなところ悲劇があったわけですが、鄧小平は、時間を有限と考えて、時間とタイミングというのを常に考える政治家なんですね。彼の座右の銘に「チャンスというのは失うべきでない。時、再び来たらず」というのがあります。彼は、これを何時も考えて政治をやっている、と内輪の会議で洩らしたことがあるんです。

鄧小平は、毛沢東の死後、文革の時に「あと十年はやる」と言ってきた人です。ですから、そろそろ退くべきだ、と思っていたと考えるのですが、そのタイミングは当初の発言からすると八五年で退いていなきゃいけない。その時に退いていれば、改革がうまくいき始めて、毛沢東体制から離脱し、人民公社も全

部やめ、中国経済が一番上向きの時だったんです。それを、自ら退かなかったところに、彼の決定的な狂いが生まれましたね。権力にしがみついてしまったために、今、こういう状況になってしまった。生きているうちから批判が出てるわけなんですから、亡くなっても評価より批判の方が多くなるでしょう。

彼はもともと敵の多い人です。もう一人、陳雲という影の指導者がいて、表には出ないので敵も少ない。老齢で病弱ですが、李鵬たちの上にいて隠然たる勢力を持っています。大事なときにはいつも一言発言するのです。普段は何も言わない。

谷沢 敵が多いというのは、持って生まれた傲慢によってそうなるのと、もう一つは、政治措置の上で出しゃばりすぎるとか権力意識が強すぎるとか、大ざっぱに言って二通りあると思うのですが、鄧小平の場合は……。

中嶋 両方ですね。毛沢東体制をひっくり返したわけですから、かつての毛沢東派や文革派からは恨みを買いますよね。また周恩来系統を全部崩上げし、かなり恨みを買いました。だがこれは、日本で非常にイメージのよい周恩来も文革当時は毛沢東語録を振って毛沢東万歳を叫んでいたんですから、僕は必然的だと思っています。文革が徹底的に批判され毛沢東が崩上げされているわけですから、周恩来が批判されるのは政治の論理から言っても必然のことなんです。

李先念という周恩来系統の国家主席ともう



中嶋 徳雄氏

まくいっていない。最近が一番の側近だった胡耀邦を切りましたでしょ。そして今度の趙紫陽。私は、鄧小平は重大なところで政治的な出所進退を誤った。毛沢東と結局は同じようになっただけという感じがするんです。

谷沢 文革時、周恩来はどのくらい本気でそんな馬鹿げた愚かな態度をとったんですか。

中嶋 周恩来は、深謀遠慮から、あの時は毛沢東にかけなければ国がつぶれるという危機意識からだったという側面はあると思います。毛沢東体制下の非毛沢東化ですね。しかし僕は、周恩来が毛沢東と組んだことで文革は決定的な悲劇になったと思います。毛沢東礼讃の責任を取らないうちに死んでしまったのですけれど。

趙紫陽失脚の真因

谷沢 文革の少なくとも初発の時期に率先して周恩来が死骸になって横たわっていたらどうなりましたでしょう。自分の死を最も高価に売りつける決断で、文革に対する疑いの目を向けさせることはできたと思うんですが。

中嶋 そうですね。中国の政治はデリケートでね。今回の中ソ首脳会談で、趙紫陽がゴルバチョフに「あなた方は政治改革をやっている。ゴルバチョフさんは若く五十八歳、われわれもまだ若い。しかしわれわれには鄧小平さんが必要だ。鄧小平さんは一昨年から第一線を退いたが、私たちはすべて鄧小平さんの指示、指導が必要なんです」と、いかにも申しわけなさそうに話していたんです。

これは、内部の機密に属するようなことでもあり、趙紫陽は伏目がちに、テレビカメラを見ることもできなかった。私は、ああ、これは大変なことになった。これはひよっとすると、大衆へのメッセージじゃないか、と思ったんです。

谷沢 なるほど、王朝政治家の特技ですな。

中嶋 NHKで解説をしている時のことでした。そこまでは私、口には出しませんでした。これはもう、大変なメッセージだと思えますね。この時、趙紫陽は党内では既に孤立していた。ゴルバチョフとの会談が終わって学生に会い、彼はちよっと涙ぐんだでしょう。一方、李鵬はハンガーストライキの学生を病院に見舞いますが、結局は、動乱だと決めてつけて学生と決裂するわけです。その晩に

趙紫陽失脚説が流れ、翌朝には北京に戒厳令でした。

谷沢 趙紫陽はその前からかなり追い詰められていたのですか。

中嶋 三月下旬から四月上旬にかけて、全国人民代表大会が開かれ、首相は李鵬ですから、今の経済改革と対外開放を全面的にストンプし、経済の引き締めを今後数年間やるという決定をしました。これが学生たちをいら立たせたんです。経済改革は、混乱はしたが、ある程度は自由な雰囲気を与えたのに、それを徹底的に締めつけてやろうというのですからね。民主化や制度的な自由が危機的な状況の中で、胡耀邦が死んだ。この過程で趙紫陽の影響力は失墜し、沿岸地区経済発展戦略や経済特区の政策は、全国人民代表大会では一言も出なかったのです。これは完全に李鵬の勝利でした。

鄧小平は、本来は趙紫陽を立ててきたにもかかわらず、彼を切り、李鵬を立てようとした。だから、学生たちは李鵬を批判するのはもちろんとして、同時に鄧小平も追及しているわけです。

ヤミ経済に高まる不平不満

谷沢 そこまで逆戻りといえますか、ヤケクソみたいな締めつけをしなくてはならなかった根拠は何ですか。

中嶋 経済の混乱です。



谷沢永一氏

谷沢 混乱と言うことは、沈滞ではなく動きがギクシャクしてですね。

中嶋 大変なものです。インフレがすごい。中国中がヤミ経済みたいなものです。うまく立ち回ればすぐもうけられる。そういう人がクローズアップされたり、あちこちにホテルもできました。しかしそれは全中国の中ではショーウインドーの中のスポットライトがあたっているところです。そこだけ見て中国が良くなった、近代化した、というのは大間違いです。そういうところには外国人と接することができれば幹部とか、昔でいう買弁みたいな人がいっぱい出てきているわけですよ、対外開放で。

谷沢 悪の権化みたいに罵られている中華民国時代と同じことですね。

中嶋 北京の高級ホテルの中は租界ですよ。それから万戸。たまたま都市の近郊でたくさん土地を持っていて、家族がたくさん

いたりする農家が、栽培で換金作物ができる条件があれば問題ないけど、地方に行ったらそんなの例外中の例外ですよ。

谷沢 大阪で言えば、河内におったら万戸になれるけど……。

中嶋 そういう人がもてはやされるのは悪平等ですね。すごい富の格差が出て、ヤミ屋みたいな人がもうかる。党の幹部が特権行使する。「官倒(カンタオ)」と呼ばれる汚職がはびこるから、学生たちの正義感をかき立てるのは無理ありません。学生たちは絶望しています。内蒙古大学の学生と語り合った時も、日本に行きたい、日本について勉強したいと言いながら中国については全く展望を持たず、絶望しているのです。深刻です。

真剣に未来を語っていた優秀な学生でも、私たち日本人に外貨兌換券をくれ、と言ってくるのです。外貨兌換券を人民元に換えろと、それだけで得になるわけです。私自身たまたまない気持でしたが、そうせざるをえない社会はその学生にとっても、すごい屈辱だったと思います。そうした学生たちが、今度の民主化要求デモでは本気になりました。

谷沢 それですね。しかし今度は、見方を変えれば、学生が正義感を持てるように成長したというか、立派な学生を育成したことになるですね。

中嶋 ただ、学生たちに将来の保証が何もない。就職も行きたいところにトライできるわけではない。だれもが、そういう社会に

してたまらない気持はあるでしょうね。

谷沢 天安門広場を埋め尽くした百万人の学生、市民ですが、その指導体制はどうなっているのですか。

中嶋 あれだけ党の権力構造を揺るがし、ゴルバチョフのスケジュールを変え、しかも中国共産党の権威を失墜させた戒厳令といい、これはただではできるものではありませんね。指導者について情報を収集、分析しているんですが、今回は陰の人物は全然浮かんでこない。まさに今回は、一種の大衆反乱でしょうね。中国共産党の一元体制を根本的にくつがえす、もう一つの革命の始まりだということです。

確かに趙紫陽が学生に加担していますが、学生が趙紫陽で満足するかというと、そうじゃないんです。むしろ、趙紫陽は孤立したために学生の方に歩み寄り、自分の立場をよくしようとしたのではないのでしょうか。当面、学生は趙紫陽ら改革派に期待せざるをえないけれど、しかし、それで学生は決して満足しないと思います。学生たちは趙紫陽にも「胡耀邦が追いつけ」とされる時には鄧小平と一緒にやってやっただけじゃないか」とか、「あなたがやった経済政策は混乱だけだ」「われわれを取り残した張本人ではないか」という気持があるんですね。

今回のデモは決して一部の組織でできたものではありません。学生と知識人が一緒に動きました。社会科学学院の研究所、中央党学校

の人たちなど意外と急進的改革派で、裏でアドバイスしている気配は見えますが、それは一部の勢力とは違います。学生たちは、「こどもし失敗したら中国にはもう未来がない」という危機感を持ち、それが運動をかなり慎重にさせたと思います。だから、あくまでハンガーストライキが中心で、真面目でしかも戦術がないからあれだけ広がったのですよ。

中国政局の鍵を握る軍

谷沢 人民解放軍の動きについて解説して下さい。

中嶋 人民解放軍の中で、首都の警護に当たる38軍というのがあり、毛沢東時代から首都警護の技術訓練を受けています。その38軍はゴルバチョフ訪中時に何かあるといけないと、その安全保障のために一所懸命やっただけです。ところが、その過程で学生たちが出てきて、学生の警備に向けようとしたが言うことを聞かなかった。そこで38軍を地方の湖北省とか山西省とかの軍隊と入れ換えようとした。そのへんが戒厳令施行の一つの原因だったと思うんです。38軍が動かないばかりか近衛兵みたいな衛戍部隊もまた動かなかった。鄧小平が牛耳っているはずの党中央軍事委員会の中にも、鄧小平の意向に背いて民主化に呼应しようという動きが出てきた。李鵬のおひざ元の国務院の各セクションも言うこと

を聞かなかったんですよ。学生だけでなく、党、政府、軍、この中に李鵬や鄧小平を批判する者が日ごとに増え、李鵬は孤立化していった。これが戒厳令施行の原因です。

軍の長老も、鄧小平に対して、人民に銃を向けるなどいはいはじめ、独裁者の末路は大体同じですが、そこで強行突破策をとった。しかしこれは結局は崩れていきますよね。

一説では、鄧小平は二十万人くらいの犠牲者を出しても平気だと言っていたそうですから、まだどうなるか分かりませんよ。

谷沢 古代からチャイニーズの特色は、ケタはずれの大量殺人に平気であるという見上げた度胸ですが、今仮に二十万を殺せる軍隊をどこから持ってくるんですか？

中嶋 それがまた問題です。北京駅には地方からたくさんさんの軍隊が来ましたが、彼らは何のために北京に来たのか教えられていなかった。しかも、総後勤部が抵抗したから食糧の補給ができなかった。彼らは学生に立ち向かうようなことは出来ないし動かなかったんです。

人治でなく法治を

谷沢 同じ共產主義専政でもこれはソ連の歴史にもなかったことですね。

中嶋 中国というのはそういう意味では五四運動の伝統がよみがえった感じですよ。いま中国は、解体の危機というか、もう一つの革

命が起こりつつあるという気がします。しかし、現実には、学生が投げかけた問題は一つ解決していません。学生の要求は、民主化つまり具体的には言論結社の自由も含みますし、憲法とか党規約など守るべきだとする護憲なんです。今までは守られたことがなかったのですから。憲法に照らしてやれば、鄧小平体制も何もかも全部崩れてしまうわけですから。第一、戒厳令だって無効です。戒厳令を敷くには、国家の承認が必要です。李鵬は国民の首相ではあるけど国会の承認をとっていない。また彼は戒厳令の施行と共に「自分は党と政府を代表して」と言いましたが、彼は政府は代表しても党を代表してとは言えなかったはずですよ。

まさにこれは、予防クーデターなんです。権力を握っている者が戒厳令を施行しても反発を招くだけです。全てが、人治であって法治ではない。中国は、法概念があまり定かでないところがあり、それに初めて気がついたということでしょうね。

しかし、法によって政治は行われなければならない。それをやらなければ中国の近代化はできないということに、初めて中国の学生たちは気がつき始めたという気がします。

谷沢 二十万を殺すといっても、項羽の時代と違うから殺す方法が簡単に準備できなかったわけでしょうね。

中嶋 そうでしょうね。

谷沢 鄧小平一派のこれから先はどうなり



A4判 バインダ式112ページ
定価 3,000円(税別)

いざという時、役に立ちます。

慶弔録

・お祝金、お見舞・御香典等の管理は万全ですか？

〈収録内容〉

- ・慶事
- ・弔事
- ・お見舞
- ・特別支出
- ・中元歳暮受け取り
- ・慶弔備忘録
- ・中元歳暮贈答
- ・年賀状差し出し

社名の刷込もできます

■刷込無(1冊単位)

1冊～ 3,000円(税別)
50冊～ 2,900円(税別)

■刷込有(30冊以上10冊単位)

30冊～ 3,300円(税別)
100冊～ 3,100円(税別)
題字作成料 4,000円(税別)

■送料：無料

※消費税としてお買い上げ金額の3%をご請求申し上げます。

※この雑誌をご覧になり、資料請求券をハガキに貼りお申し込みの方には1割引きで提供させていただきます。

TKC広報部

〒101 東京都千代田区神田神保町3-2-6 丸元ビル1F
担当/石川・吉沢

☎ (03) 239-0068

大阪営業所：大阪府吹田市江坂町1-23-101 大同生命ビル13F
☎ (06) 386-2640

ましようか。

中嶋 長期的にみると、李鵬、鄧小平はいわば、石をもって追われる形にならざるをえないと思います。そこで趙紫陽がでてきたとしても中国は、学生たちが要求した民主化、改革を制度化すればともかく、そうでなければそう簡単にこの動きはおさまらないと思います。しかし本当にそれをやるということは、共産党の一党体制が崩れることになるのですから。しかしながら、そこまで行く弾みがつき始めたとは私はみています。

谷沢 そうすると、将来、共産党体制が内部から崩壊するという、現代の権力者としては最悪の事態も考えられるのでしょうか。

中嶋 そう言えると思います。

谷沢 それにしても、現代チャイナの学生たちは、時代に対してどうしてそれほど賢く

なったんでしょうか。

中嶋 西側の影響が非常に大きいと思います。特に香港、台湾。その上、ゴルバチョフ改革への関心も非常に高く、「ソ連でさえも」というのが大きいんです。また台湾は大きな反面教師になっていて、「台湾の経験に学べ」、「蔣経国でさえ民主化をやった」と今回のデモの中で学生たちは言っています。これは非常にシンボリックですよ。せつばつまると、人間は賢くなるのではないのでしょうか。

谷沢 なるほどね。理解の早い時代ですから。

中嶋 今度のことではやはり、中国における知識人の役割というのは、きちんと評価しなければいけないと思います。学生たちが立ち上がりましたが、中国はなお前途多難です。

今の中国の生活水準は、一人当たりGNPが日本の百分の一、三百ドル前後です。十一億の国民全体が近代的な市民意識を持つには、一人当たりGNPが二千ドル前後にならないと無理ではないかと思っています。そうすると社会も安定し、貯蓄率も高まって、世の中が落ち着くんです。台湾も韓国もこれはとくに通過しています。中国がそこまで行くにはまだ大変です。

谷沢 その間が気の遠くなるほど長いでしょう。

中嶋 さあ、二十一世紀の中ごろか……。

谷沢 そんな先ですか……。要するに自分たちの甲斐性でやって行く事ですね。私たちも関心をもって見守っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

☆